資料３

新しい認知症観への転換を図るために

1. 新しい認知症観とは

市民一人ひとりが認知症への正しい理解を深め、自分事としてとらえるとともに、「認知症になったら何もわからなくなる」という否定的なイメージから、「認知症になったら何もできなくなるのではなく、認知症になってからも、一人一人が個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間等とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができる」という「新しい認知症観」へと転換を図るため、本市では取り組みを進めている。

古い認知症観	新しい認知症観
（他人ごと、問題重視、疎外、絶望）	（わがこと、可能性重視、ともに、希望）
①他人ごと、目をそらす、先送り	①わがこと、向き合う、備える
②認知症だと何もわからない、できなくなる	②わかること、できることは豊富にある
③本人は話せない/声を聞かない	③本人は声（サイン）を出せる/声を聴く
④おかしな言動で周りが困る 社会の負担	④本人が認知症バリアの中で一番困っている バリアをなくし、暮らしやすい地域を創る先駆け
⑤危険重視	⑤あたりまえのこと（人権）重視
⑥周囲が決める	⑥本人が決める（決められるような支援）
⑦本人は支援される一方	⑦本人は支え手でもある。「ともに」ある、 支え合う
⑧認知症は恥ずかしい、隠す	⑧認知症でも自分は自分、オープンに
⑨地域で暮らすのは無理	⑨地域の一員として暮らし、活躍
⑩暗い、萎縮、あきらめ、絶望的	⑩楽しい、のびのび、あきらめず、希望を

出典：令和5年1月　認知症地域支援体制整備全国合同セミナー資料
（認知症介護研究・研修東京センターホームページ）をもとに作成

2.「新しい認知症観」を広げ、転換していくための方法について

「新しい認知症観」を広げ、転換していくために有効な方法等について、委員の皆さまの日頃の活動や、専門的視点からご意見を伺いたい。